季節のお便り Vol.1

橋本絵莉子 波多野裕文

音楽について、いま思うこと

波多野裕文

僕にとって音楽をつくることは、踊りによく似ている。正確にいえば、振り付けに近いかもしれない。

そもそも考えてみると、演奏の行為そのものが、おもいきり踊りと似ている。同じ振り付けでも踊る人が違えば印象はだいぶ変わるだろうし、同じ人が同じ踊りを何度か踊ったとしても、気分やコンディションの変化にともなって、完全に同じ踊りは一度もないはずだ。演奏だってそう。同じ曲でも、人間が演奏する限り、同じ演奏するになることは絶対にない。

にもかかわらず、その表現をいつも同じように再生できるように型をつくるというのが振り付けであり、作曲である。

僕は日常、すすんで踊ったりはしない。ひとり音楽を聴きながら、思わず珍妙なダンスを誰にみせるでもなく即興で舞うことはよくある。他にも、目の前の愛らしい動物を混乱させてみたいという謎の欲求から、ことさらみせつけるように激しく踊ってみたりするような例外も、ないわけではない。

しかし地域の祭りとか催しとかそういう機会でもない限りは、決まった踊りを人前で自分からはすすんで踊ったりしないし、場合によっては、妙な自意識がやたら発動して、むしろまったく踊れなくなってしまう。典型的な踊り慣れてない日本人。自分が行うぶんには縁遠いほうではあると思う。でも、どういうわけか踊るという行為のありかたそのものには、深い興味を、共感を強くもっている。

僕は子どもの頃から、ひとりでいるのがとても好きだった。だから集団行動というのは、ただただ窮屈さと我慢の象徴で、学校生活に至っては、まるで踊りたくもない振り付けを押し付けられたような気持ちで過ごした。特別奔放に振る舞いたいとか、何かに反発したいという気持ちは微塵もなく、大勢の人が同じ歩調で行動を共にすることを強いられることが、なぜだかシンプルにつらかった。

そこで僕は度重なる遅刻や保健室利用、授業不参加などの高度な技術を用いて、次第に亡霊のように存在感を薄めていき、中学三年に上がる頃には学校から自然と姿を消すことに成功した。

それから僕は特に何もせずに、毎日を過ごした。有り余る時間。自転車で海にいったり、十六歳からは深夜のコンビニでアルバイトしたりした。自動車免許が取れる年齢になるとすぐに免許を取って、親の車が使われていない深夜、北九州の暗い街をひたすらドライブしたりした。

それ以外の時間をあてて、音楽をひとりで延々つくっていた。誰に聴かせるつもりでもなく、ただなんとなく。

そのころの僕にとって音楽をつくることは、まさに深夜のドライブに似ていた。ヘッドライトに照らされた、人通りの消えた夜道をどの方角へと走らせていくか。目的地もなく、ゆっくりとハンドルを切って、アクセルを柔らかく踏んだ。あたまのなかに広がっていく地図を、描きたいように描く。時間だけはたっぷりある。次の和音を選ぶまで誰かが急かしてくるようなこともない。あわてる必要なんて一切なかった。

時間は過ぎて、二〇一一年。東京。僕は音楽をつくる理由を探していた。上京してからの短くない時間のなかで、気付かないあいだに、身体はこわばってしまっている。これまで熱を帯びていて、立ち止まることもなく走り続けていた車のエンジンが冷えきったようだ。我に返ったように、なぜ音楽をつくっているのかを自分自身に問いかけている。

これはまるで、学校にいた時の居心地の悪い感覚に似ている、と思った。踊りたくもない振り付けを押し付けられたような、あの窮屈な気持ち。ところがどうだ、ここは学校ではない。誰に頼まれたわけでもなく、じぶんで選んで立っている場所だ。誰も僕に踊りを、振り付けを押し付けてなんかいない。

かつて理由もなく音楽をつくりはじめたはずなのに、不思議なことにいつからか、理由がなくてはいけないと勝手に思い込むようになっていた。そのことに気づいた瞬間、肩の力がふっと抜けた。

僕はただ自分が踊る踊りの振り付けを、好きに、思うがまま、自由につければいいだけなんだ。

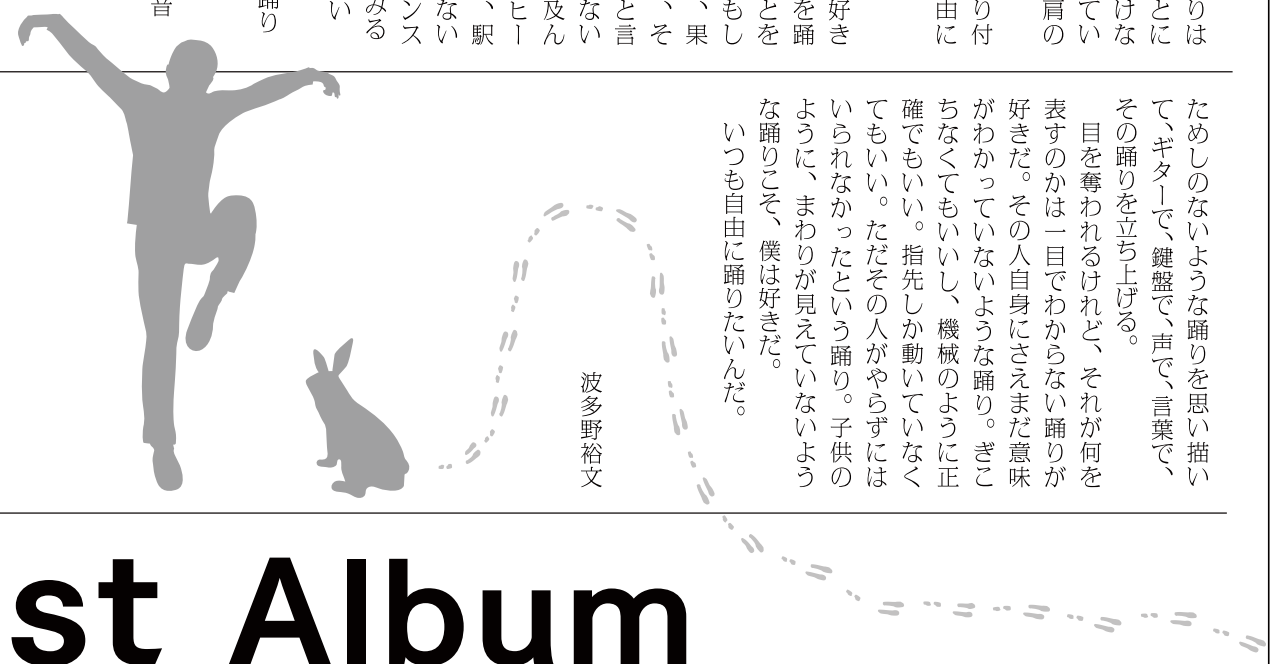
僕は踊りという概念がすごく好きだ。例えば、どこからどこまでを踊りをいうのか、というようなことをふと考えてみる。そうすると、もしかすると人の言動や態度、表情、果ては繰り返す毎日の生活すべて、それぞれの仕事や営みをダンスだと言い切ってしまってもおかしくはないのではないかというところまで及んでいく。「おはよう」そしてコーヒーメーカーの音、髪を乾かす動作、駅に向かう全力疾走。そんな何気ないひとつひとつが美しい即興のダンスだ。そんなふうに思って眺めてみる世界が、僕には素敵に思えるというだけのことかもしれない。

その世界の未来で人はどんな踊りを踊るのだろう、僕はどんなふうに踊ってみたいのだろうという空想がつまり、僕にとっての音楽をつくることだ。

踊るのに理由はいらない。僕はあたまのなかに自分がみたこともないような、やったためしのないような踊りを思い描いて、ギターで、鍵盤で、声で、言葉で、その踊りを立ち上げる。

目を奪われるけれど、それが何を表すのかは一目でわからない踊りが好きだ。その人自身にさえまだ意味がわかっていないような踊り。ぎこちなくてもいいし、機械のように正確でもいい。指先しか動いていなくてもいい。ただその人がやらずにはいられなかったという踊り。子供のように、まわりが見えていないような踊りこそ、僕は好きだ。

いつも自由に踊りたいんだ。



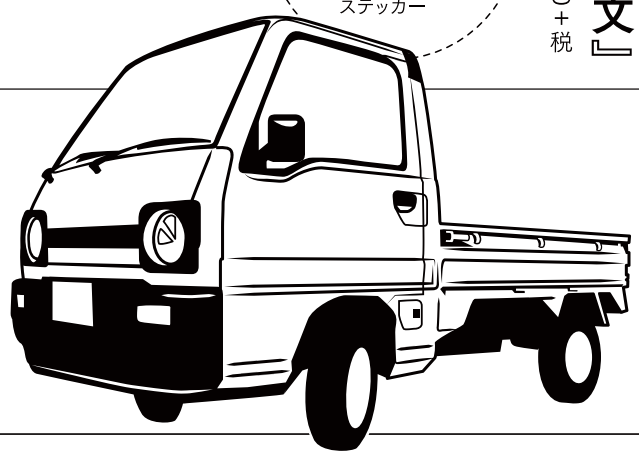
波多野裕文

本子野文
莉多
橋絵波裕

ファーストアルバム
『橋本絵莉子波多野裕文』
KSCL 2950 ¥2,800＋税

〈収録曲〉
1. 作り方 [1:24]
2. 飛翔 [5:00]
3. 幸男 [5:24]
4. ノウハウ [3:44]
5. トークトーク [4:20]
6. 流行語大賞 [3:25]
7. アメリカンヴィンテージ [6:10]
8. 君サイドから [5:34]
9. 臨時ダイヤ [5:11]

初回仕様限定盤
① デジパック仕様
② 波多野語録
③ やばいおじさん ステッカー



1st Album
2017年6月21日発売

www.yabaiojisan.com

Kioon
NOT FOR SALE